

## 思ひ出話（戦前編）

国吉秀雄

寿会の皆さん、ご無沙汰しています。昨今、昔の記憶が次第に薄れてきたので、この辺で虫食い部分を補修しながら、思ひ出すままに勝手な昔話などして、平素のご無沙汰のお詫びとさせて頂きます。

数々お世話になった恩師、先輩、そして苦勞を共にした同志諸氏に改めてお礼を申し上げると共に、無断でお名前を出してご迷惑をおかけすることをお許し下さい。

### 一、生立ちの記

昭和初期、東京、芝新橋駅の烏森口に処女林と云うキャバレーがありました。そして、その並びに、KS美粧院という女性専門の結髪、着付けの店がありました。そこが私の生家です。何しろ電車（当時は省電といいました。）の轟音と歓楽街の嬌声が深夜まで物凄く、こういう環境の中で子供を育てる親の神経を疑います。

ただ、土地柄から商売はかなり繁盛していた記憶はあります。子供の頃は、ご多分に漏れず、飛行機、船、電車が

大好きで、その中でも大いに空に憧れたものでした。母親は大反対、金物でこしらえたあんな重いものが空を飛ぶ訳がない、あれは神業なのだから、船は穴があれば沈むし、電車は脱線するから怖い、だから将来そんな仕事に係わるんじゃない、と言うのが口癖です。

あの酷い喧騒の中で子供を育てた神経とどこか矛盾してはいませんか？ 余談ですが、会社の営業拠点が近くにあり、また吹込所（古い言い方ですね）が築地に新設されたのも当時と聞いております。

従って文芸部や営業部OBの方々にはお馴染みの界限ではなかったかと思いますが如何？ 昭和八年に新曲「東京音頭」を駅前広場に踊りに行った覚えがあります。もともと、世相としては昭和十一年に二・二六事件、一二年夏に日華事変、一六年暮、ついに太平洋戦争勃発と次第に戦時体制になって来たので、当然この頃から規制が厳しくなり、歓楽街は急速に寂れてゆきました。

### 二、師匠とその弟子

昭和一七年三月、就職の時がやって来ました。常日頃母

親から飛行機関係は絶対駄目と言はれてきました。一人っ子の親としては当然の言い分なので、残念ながら空への夢は断念しました。順番から言つてあとは船か鉄道です。

同年四月、東京目黒にある海軍技術研究所へ入りました。

面接の時、磁石とレンズが大好きだとか何とか言つたせい  
か、或いは運命の悪戯か分かりませんが、ある研究室に配属になりました。そこは光電管、撮像管ブラウン管、など所謂電視管の試作研究室でありました。てつきり潜水艦に乗れると思つていたのに残念でした？ まあいいやー

その研究室で初めてテレビジョンなる装置を見せて貰い、大いに関心を持ちました。実に不思議な仕掛けで、これは将に神業です！ 確かその時の装置は、撮像管としてアイコノスコープが使われており、またブラウン管は直径25cmでしたが、何故か画面は緑色をしていました。この研究室の室長は佐口辰雄さんという方で、浜松高工（現静大）で、高柳先生の助手をされていたと言う事を後で知りました。以来、この師匠から厳しくしごかれる羽目になりました。ところで、この師匠中々の苦勞人で、厳しいばかり、でなく時折頼みもしないのに女の子の口説き方

なども聞かされました。非常に人脈が豊かで、この方のお陰で、後年どの位助けられたか分かりません。なお同室の専任研究員に、徳光博文さんが居られました。

### 三、新米船頭

同年秋某日、当研究所構内には径約200mのかなり深い実験池がありました。（防衛庁施設として今でもあります）その池の中央には櫓に組まれた実験塔があり、そこへ機材を運ぶ為の、艀で漕ぐ小さな猪牙舟が一艘あるだけでした。当日は日本放送協会（現NHK）技研から高柳、松山、2両先生が研究指導に来られる日であり、そして私が先生方のお世話をする事になっておりました。機材類は実験塔に無事運び終えましたが、いざ高柳先生を送迎する時になつて緊張の余りか、艀臍をはずしてばかりいて、もう少しで舟を転覆させそうになりました！ もし転覆でもしていたら一大事、権威を池に落としたとあつては只では済みません。軍法会議にかかり銃殺されかねません。見ていた徳光さんも青くなりましたが、先生は「君は実験の方は大分上手くなつたが、舟の漕ぎ方はまだまだだな、此処は海軍さ

んなのだから、もう少し舟の扱い方も研究しなさい」といはれて大笑いされました。新米船頭になんという優しさ、冷や汗をかいた秋の一日でした。

#### 四、帝都炎上

昭和二十年五月二十四日、このところ頻繁に空襲があり、過日の三月十日には、本所、深川方面が空襲を受けて多くの犠牲者が出たばかりです。(この時、築地スタジオを失い、また四月四日の空襲で横浜工場が罹災した事を先輩から聞きました) 当所でも交代で当直警備をする事になっており、当夜は、たまたま徳光さんと私が当番でした。研究棟の屋上で監視をしていたところ、夜半になって空襲警報が発令され、BSOの大編隊が来襲したのです。そして無数の油脂焼夷弾が投下され、たちまち城南一帯は火の海となりました。私事ですが、自宅は当研究棟から見て丁度愛宕山のNHKアンテナの向こう側に当たります。その辺一帯は空襲が始まって間もなく炎上したので、覚悟はして居ましたが、両親の安否が気懸かりでした。翌日許可を得て自転車进行り、天現寺→古川橋、を経て家へ帰りま

したが、道々火と煙の中を潜るような状態でした。自転車は思うように進みません、熱でアスファルトが軟化しているからです。自宅は全焼しましたが、両親は増上寺へ逃げて無事でした。後で、父親から聞いた話ですが、二階の物干しで火叩きをもって警戒していたところ、凄いい落下音とともに焼夷弾が二発落下し、一発は屋根、天井を貫通して二階の和室で発火し、もう一発は何故か階段の下で発火したそうです。無我夢中で逃げたが、もう少しで二人とも逃げ遅れるところだったと述懐していました。

#### 五、終戦の日

あの上空襲の後、職場は急遽疎開することになりました。佐口さんは山形県天童へ、徳光さんと私は神奈川県逗子へ移転しました。当時、湘南海岸は、本土決戦の戦場になると言はれており、海岸地帯の主な建物は殆ど無人です。我々の移転先は開成中学です。また、宿舎は渚ホテルに決められましたが、いくら豪華ホテルでも無人では甚だ不便な上、不気味なものです。私は鎌倉材木座の知人の

家を下宿して、そこから逗子へ通っていましたが、間もなく追浜の航空基地に出向を命ぜられました。追浜と横須賀の間を光線電話で交信するというのが任務です。この基地でも、いろいろな事を見聞きました。この頃は、米艦載機が頻繁に来襲して機銃掃射をしています。飛行場に並んでいる軍用機が攻撃され、破壊されて炎上するのを何度も目撃しました。しかし基地ではあまり動揺しません、あれは囀の模型機で、敵も承知の上だと言う者さえ居ます。

昭和二十年八月十五日、戦争は終わりました！この日の夕暮れ、秘密に格納されていた相当数の爆撃機、戦闘機が、夕暮れの東の空に向かって一斉に飛び立って行ったのが非常に印象的でした。何処へ向かったのか私には分かりませんが、決戦に備えて蓄積したエネルギーを、隊員達は一体どうする気なのでしょう？翌日、所員一同、逗子に集合して解散命令を受けました。やはり戦前の思い出話となると、どうしても暗い話になってしまいますね。次回、機会があれば戦後篇を投稿します。社内での珍談、奇談をご期待下さい。